

明治時代に入り、1889年に町村制公布を受けて吉野谷村、尾口村、白峰村が誕生した。大正時代になると林業、養蚕、焼畑を基幹的産業として地域は栄えたが、日本経済の高度成長とともに過疎化が進行していった。そこで、地域活性化の起爆剤として、手取川ダムの建設を中心とした総事業費3,177億円に及ぶ手取川総合開発事業が1974年に始まった。ダム建設で尾口村、白峰村の5つの集落が水没したが、白山地域のメインルートである国道157号が無雪道路化され、金沢への交通アクセスが大幅に改善された。同時に、白山地域は公共事業、特に土木事業への依存体質が強まり、また地域振興のための観光開発が積極的に進められていった。

## 2. 白山地域の観光の概況

白山地域には自然資源、歴史・文化資源、観光施設などが数多く存在している。石川県の調査によると、白山地域1町5村の観光入り込み客数は115万2000人(1988年)であるが、1997年以降は減少に転じた。主な観光施設として白山比咩神社やスキー場などがあるが、スキー場の利用者数の最近の落ち込みが地域全体の観光入り込み客数の減少に影響している。

白山の山岳地帯は1962年に白山国立公園に指定されている。主な利用形態は登山や自然観察であるが、温泉宿泊施設での保養や白山スーパー林道での自然探勝などもある。白山国立公園の区域はUNESCOの「生物圏保護区」や文化庁の「カモシカ保護地域」、林野庁の「森林生態系保存地域」にも指定されている。白山地域の植生はブナ帯が大きな面積を占め、その規模と自然度の高さは全国有数と評価されている。また、和名にハクサンを冠する植物が18種に及び、ハイマツやクロユリなど100種を超える高山性植物が白山を西限としている。また動物相も豊かで、ニホンカモシカやツキノワグマなどの大型哺乳類、国のレッドリストの絶滅危惧類にランクされているイヌワシやクマタカが高い密度で生息している。

白山を訪れる登山者数は近年ほぼ3万人前後で、うち約8割が宿泊を伴っている。しかし、登山者が7月

下旬から8月中旬の週末に集中するため、飲料水の不足や汚物処理、踏みつけによる裸地化や登山道の侵食などの自然破壊が起こり、環境容量面から見ると、夏期の白山登山利用はほぼ限界に達していると考えられる。また関西・関東地方からの登山者および中高年登山者の増加が近年の傾向である。

白山地域では、手取川総合開発事業によって観光開発が進められたが、その1つにスキー場開発がある。これは若年者の雇用の場を確保することを目的とした地域振興策であり、白山地域にある4つのスキー場はいずれも1970年代から80年代にかけて開業した。しかし、近年の暖冬傾向や近隣各県での相次ぐスキー場の開業による競争の激化などから、スキー場の利用者数はピーク時の半分以下にまで落ち込んでいる。

吉野谷村には白山の北側を横断して岐阜県白川郷に至る白山スーパー林道があり、新緑や紅葉の季節には多くのマイカーや観光バスが訪れる山岳観光ルートとなっている。ルート上の中宮温泉などは観光温泉化し、多くの観光客が訪れるようになったが、最近ではスキー場と同様に利用者数の減少が続いている。この他にもさまざまな観光施設が作られたが、観光開発によって提供された施設の多くは一過性で、開業後はいずれも入り込み客数が減少傾向にある。このような観光客数の減少が危機感となって、白山地域のエコツーリズムの創出に結びつく可能性のある取り組みが行政や地域住民から起こりつつあるが、まだ大きな動きにはなっていない。

## 3. エコツーリズムの導入可能性

### (1) 地域資源を活用したエコツーリズムの萌芽

白山地域におけるエコツーリズムの導入可能性を検討する前に、エコツーリズムに発展する可能性のある施策や事業の動向について整理した。

石川県では夏期の白山登山者を対象とした自然解説を「石川県自然解説員研究会」に委託し、自然保護意識の高揚を図っている。また、白山自然保護センターでは「ブナ林観察会」や「かんじきハイイクでの動物足跡観察会」などを年数回開催しているほか、白山地域各